

「奇跡の復興米」

学校長 梅田 比奈子

先日、新聞記事で「奇跡の復興米」という言葉が目にとまりました。読んでみると、東日本大震災の津波に耐えた岩手県大槌町の「奇跡の復興米」をルーツにする稲が大阪府富田林市の田んぼで黄金色に実り、5年生が刈り取ったという内容でした。「『奇跡の復興米』とは何だろう」そんな思いで、少し調べてみることにしました。それは、東日本大震災を今でも昨日のここのように覚えているからです。

大変な揺れ、その後みたテレビの映像。今までに経験したことのなかった災害でした。7月には、津波で流された気仙沼や南三陸に入りました。見たことのない風景。その中で、復興に向けて頑張っている人々に出会いました。サンマ漁をしていた若者は、その再開に向けて、熱い思いを語ってくれました。そして、8月11日。ある中学校に学習支援のために行きました。学校もまだ、正常な状態ではなく、校舎の一部にはがれきが残っています。しかし、そこで一生懸命に学ぶ中学生がいました。その真剣な姿に胸をうたれると同時に、どんな思いをいっているのだろうと心が痛みました。勉強していた2時47分。私の目の前にいた中学生が、そっと「今から5か月前に地震があったんだなあ。」とつぶやきました。静かに、静かに……。いろいろな思いが交錯する中、前向きに進もうとする姿を強く感じました。

今回の「奇跡の復興米」。これも、あの時の人々のように、新たな未来へ今をつなぐものではないかと、あの日々を思い出しながら調べました。すると・・・この米は、東日本大震災が発生した年の2011年10月に、津波により流され瓦礫となった岩手県大槌町安渡地区のあるお宅の玄関先から、奇跡的に見つかった3株の稲穂だそうです。塩害を乗り越え育った「奇跡の復興米」は、そのお宅の方に翌年から育てられ、「大槌安渡(あんど)ひとめぼれ」と命名されました。当初、この米は、被災者が作る新たな復興のシンボルとして育てようと、種籾を岩手県内から出さないようにしていたそうです。しかし、2014年、様々なかわりのあった大阪府富田林市に種もみが託され、今に続いています。今年も、コロナ禍の中、市内小学校の5年生をはじめ、様々な人がこの米を育て、大槌町や熊本地震の被災地益城町等へ送るそうです。

被災地で奇跡的に見つかった稲穂。それを守り育ててきた人。復興支援がつかない人と人。そして、それが次のつながりへ……。人は、本当に豊かで、つながることで強くなれると改めて思いました。



スポフェス、5年の体験学習が終わりました。今年は、人がつながり、支えてくれたから「できた」ということをいつもより強く感じました。そして、行事が終わった時の子どもたちの笑顔が素敵でした。

これから、6年生の修学旅行やふれあいフェスティバルがあります。前向きに、つながり、希望をもって進むことが「奇跡」を生んだり、「笑顔」につながったりするのではないかと思います。